本願寺金沢別院　本堂・経蔵・鐘楼　附古図

種　別　　有形文化財（建造物）

員　数　　本堂１棟　経蔵１棟　鐘楼１棟　附古図　13枚

所在地　　金沢市笠市町２番４７号

　　(古図：金沢市諸江町上丁136番地4)

所有者　　宗教法人　本願寺金沢別院

　　（古図：中川隆志）

概　要

○創立と沿革

浄土真宗本願寺派金沢別院は、天文１５年（１５４６）に創建された「金沢御堂」を前身とし、別名「金沢坊」や「御山」と呼ばれ、加賀一向宗の拠点であった。

その後、金沢御堂は、天正８年（１５８０）柴田勝家に攻略され、佐久間盛政の居城となるが、前田利家の金沢入城後、文禄年間(１５９２～１５９６)迄に、袋町に寺地を賜り本堂を再建した。慶長１６年（１６１１）には、三代藩主前田利常より、現在の寺地を拝領して伽藍再建に着手し、元和５年（１６１５）に完成、寺基を移した。

しかし、元禄３年（１６９０）以降、度々火災に遭い、本堂は嘉永２年（１８４９）に、経蔵は慶応２年（１８６６）に、鐘楼は安政３年（１８５６）に、それぞれ再建され現在に至っている。

○本堂

本堂は境内の中央に東面して建つ、平入り、桁行九間、梁間八間の大規模な建築である。屋根は、入母屋造り、本瓦葺で、向拝は三間の間口をもち、妻部に比翼の千鳥破風を付けた特徴ある外観である。

本堂の平面は、前方に畳１３２帖の外陣、４４帖の矢来内を置き、中央後方に、二段高く床をあげた後門形式の内陣を配し、その脇に内陣より

一段落として左右の余間、さらに余間の外側に三の間をとり、内陣及び余間の後方に後堂を置く。本堂の外周は前面及び両側面に広縁と落縁を付け、後堂の背に後補の倉庫が付加されている。

構造的には、柱は向拝柱と縁柱を角柱とする以外はすべて円柱を使用し、入側柱を含めそれより内側の柱は、いずれも柱頭を天井裏まで延ばし、小屋梁を直接受ける「建登柱」の手法をとり、大建築にふさわしい構造的な配慮がなされている。

組物は、いかにも江戸後期の建築らしく多彩であり、なかでも外陣中央の四本柱に架け渡す虹梁形の飛貫は圧巻で、正面の矢来内境にかかる３０尺におよぶ大梁は見事である。

また、内陣の装飾は、柱や長押のすべてに金箔を施し、柱上部の組物・天井にいたるまで極彩色で化粧されているなど、極めて華麗である。

なお、使用されている木材は、そのほとんどが欅の大木から木取りされたもので、その加工の巧さと相まって、いたって上質な建築となっている。

このように当堂は、浄土真宗本願寺派の地方における拠点にふさわしい規模と格式を備えるとともに、江戸後期の建築技術の特色がいかんなく発揮されている。また、建築年代や棟梁の名（加賀の宮大工、中川政乗）が明らかであり、当時の図面（本堂関係10枚を含む13枚)も現存しており、この地の建築文化の発展を知る上で歴史的価値は高い。なお、図面はたいへん貴重な資料であり、附とする。

○経蔵

経蔵は本堂正面に向かって左手前に位置し、六角の平面で吹放しの裳階をつけ、柱は、礎盤上に六角柱を建てる。主屋の屋根は、露盤付宝珠を乗せた桟瓦葺の六角方形であり、軒は二軒扇垂木となっている。裳階の屋根は桟瓦葺で、軒は、一軒平行繁垂木である。正面上部の壁に、「仏が教えを説くこと」を意味する「轉法輪」と書かれた扁額が掲げられている。

組物は平三斗組（絵様実肘木、拳鼻付）となっており、中備には蟇股を配し、裳階の組物は大斗絵様肘木組とする。

経蔵内部には、経典を収める八角宝形の回転式輪蔵を備えており、県内でも数少ない輪蔵の一つとして、貴重である。

この経蔵は、六角平面であるばかりでなく、細部に施された彩色や、外壁上部の漆喰壁に見られる窓の形や鏝絵など、江戸後期の多様さを持つ建築物として、貴重である。

○鐘楼

鐘楼は、経蔵の東方に位置し、方一間の吹放しの入母屋造りで、屋根は桟瓦葺、軒は二軒扇垂木となっている。基壇の上に礎盤を置き、その上に粽付丸柱を建て、貫は下から、腰貫、飛貫、頭貫（虹梁形）を入れ、頭貫上には台輪をめぐらせている。

組物は二手先（実肘木、挙鼻、尾垂木、支輪付）を詰組とし、中備に蟇股を配す。

装飾的な組物と放射線状の扇垂木で構成される軒廻りは、実に多彩で、江戸後期の禅宗様式を見事に見せている鐘楼として、貴重である。

以上のことから、これらの建造物の文化財的価値は高く、有形文化財に指定し、その保存を図ることが必要である。

その他　　金沢市指定保存建造物　　平成１３年９月２１日